

ダメットの「意味理解の顕現化」概念の擁護

三上温湯 (Mikami Onyu)

首都大学東京大学院人文科学研究科

自然言語の意味理論 (Meaning Theory/Theory of Meaning) を構築しようという試みは、1970 年代頃から、ドナルド・デイヴィドソンをはじめとした論者によって、さまざまな手法で取り組まれてきた。意味理論が具体的にどのようなべきかということについては、依然として多様な立場があるにせよ、こうした理論構築の試みは、現代における有意義な哲学的探求主題と認められていると言ってよいだろう。マイケル・ダメットの意味の理論は、中でも独自性の強いアプローチであり、彼は、意味理論とは当該言語に習熟した話者 (competent speaker) の理解の説明であるべきだという立場をとった。こうした立場に対する批判はあるにせよ、このようなダメットの課題設定は、意味理論として当然求められるべき事柄であり、また、それ自体非常に興味深い哲学的課題であるように思われる。というのも、ダメットの意味理論においては、概念習得ということが (おそらく最も枢要な) 課題となっているからである。通常、意味理論というと、よく知られているような、タルスキ型の形式言語の真理条件意味論を援用した意味理論に見られるように、具体的言語表現と、既知のものと同前提された何らかの意味内容の結びつけを行うことが主要な課題だと思われるかもしれない。しかし、ダメットの理論の射程にあるのは、ある主体が、ある概念を理解しているとはどういうことか、言い換えれば、その主体が当該概念の習得を通じてどのような実践の可能性を獲得しているかということなのである。そしてこうした概念の獲得は、典型的には言語習得を通して為され、また何らかの言語表現の意味理解として説明されるべき、意味理論の課題なのである。ここでは深い議論は避けるが、以上のようなことから、意味の理論が言語習熟話者の理解を対象とするべきであるという彼の立場は十分に首肯しうるものだと言えるだろう。

ところでダメットは、こうした理論構築に際し、「意味理解の顕現化(manifestation)」を要求した。これは大まかに言えば、文の意味理解は顕現可能でなければならない、というものであり、ダメットは、意味の理論が、この顕現の特定、すなわち、言語習熟話者の理解がいかなる仕方で当該話者の言語活動において顕現するかということ特定せねばならないと主張したのである。こうした主張に対してはとりわけ批判も多く、彼の提示した顕現化の要求は、意味理解に対して過大であるばかりか、充足不可能であるとさえ言われる。確かに、ある主体が何らかの意味理解を持っているということの顕現であるような振る舞いを特定することは非常に困難に思えるし、ダメット自身、その点の具体的理論化には至っていない。また、なぜ顕現を特定せねばならないのかということ自体そう自明でなく、

特殊な理論的関心事であるように思えるかもしれない。

そこで、本発表では意味理解の顕現化ということが、我々が実際に行う言語実践の中で不可欠な形で起こっているということを示したい。意味理解の探求と言うと、端的には、ある主体がそれ自身で持っている理解の特定をどのようにして行うか、ということがまずもって問題となっているだろう。そして実際多くの批判があるように、このような理解の特定は不可能であるように思われるかもしれない。しかし一方で、理解の帰属ということに目を向けてみれば、我々が、他者の行為を記述し、何らかの(合理的)行為として評価する(evaluate)という日常的営みの中で、その行為主体に対し、一定の概念理解を帰属していることが前提となっていなければならないということがわかってくる。そのような営みが日常的に為されていることを踏まえると、例えば、他者に何らかの行為を任せたり、何らかの行為に対する責任を問うたりする場面などにおいては、その主体が何らかの概念を理解していることが単に前提されているというだけではなく、本当にその主体にそうした理解が帰属できるかがシリアスな問題となる局面を想定することができる。このような観点から、意味理解の顕現が特殊な理論的要求などではなく、我々の行う言語実践において実際に要求される事柄として捉えられるという見通しを示し、顕現化が、意味理解の説明においてどのような仕方で重要な役割を担うかを検討する。